

イタリア格安パック旅行 2016



2016年3月

旅のチカラ研究所 植木圭二

第一章 いざイタリアへ

■なんと10万円を切るパッケージツアー

2015年12月、パソコンに飛び込んでくるeメールを見ていたら阪急交通社から10万円を切って99800円でイタリア8日間全食事付き、添乗員同行ツアーというのを見つける。信じられない価格である。

もともと妻がイタリアに行きたいと言っていたが、2016年4月に出航する世界一周の船旅で地中海を通るのでローマへのオーバーランドツアーがあり、これを利用しようと考えていた。船旅のオーバーランドツアーというのは、ある寄港地で降りて次以降の寄港地で再度船に戻る小旅行である。ギリシャで降りて、ローマへ飛行機で移動しローマで2泊して同じイタリアのシチリア島で船に戻るという2泊3日の小旅行が10万円以上する。地中海それもイタリア近海に来ているのにこの価格は高いかと思っただけで、日本から行くことを考えると時差もないし楽である。

そんな矢先、99800円でイタリア8日間である。ローマ以外にミラノ、フィレンツェ、ベネチアなども見られる。さらに全食事付きで、添乗員付きなので至れり尽くせりである。

旅行会社ホームページには当初の価格から4万円ほど値下げしたとあり、最初の売り出し価格は139800円のような感じである。そして出発日も増えている。価格ダウンしたら応募が殺到して急に商品を増やしたような感じである。あるいは航空会社から大幅価格ダウンの席がいきに出たのだろう。

いずれにしても、これはもう行くしかない。いつ行くのか？ それは「今でしょう！」。

2月18日出発、定年退職まで1ヶ月半である。37年間のサラリーマン卒業旅行である。

■いよいよ心躍る成田へ

成田出発の海外旅行や出張は多く経験してきたが、いつも心躍る。この緊張感や期待感が好きである。今回は卒業旅行であり、なおさらである。

いつも成田空港へ行く場合、私たちは自家用車で行き空港近くのパーキングに停めることにしている。しかし出発時はともかくも帰国時の時差ボケがやや心配なので今回は別の手段も含めて検討する。

手段といっても選択肢は電車、バス、自家用車の3つである。住んでいる場所にもよるが、私の家からでは運賃も時間も大差はない。あえて序列をつければ運賃は高い順に電車、自家用車、バスである。そして時間は運賃が高いほど短い。

熟年夫婦の旅は安く、ゆっくりで良いのである。バスは横浜 YCAT まで行けばあとは座って行けて成田空港で降りて出発ターミナルへのアクセスも楽である。渋滞を考え早く出ないといけないが、時間はある。しかし最大の理由は帰国時に時差ボケや飛行機の中で眠れないので酒を飲みすぎた場合の安全策である。この安全策というのが熟年の旅のポイントと思い、今回は初めてバスを選択する。

横浜 YCAT から成田まで通常片道 3600 円であるが、大人 2 名往復で 11000 円という回数券を使う。さらに 25 歳までと 65 歳以上は片道 2000 円で乗れるとあり、若者と年配者はこれを利用しない手はない。

空港について手続きをして、あとは出発まで 2 時間以上も時間がある。いつものように有料ラウンジに向かう。カード会社のゴールドカード会員向けサービスで、ドリンクも飲めるラウンジを無料で利用できる。昔はゴールドカードを持っている人は少なかったが、顧客獲得合戦の末に今では猫もしゃくしも持っている。もちろん私も持っている。

落語で「猫もしゃくしも・・・」というセリフをなぜか思い出す。その中では、猫は分かるがしゃくし（杓子）は「しゃもじ」だから無理だという台詞があるが。まあ、いいか。

今回は 2 枚のゴールドカードを持参したので、まずは AMEX カードのラウンジに入る。缶ビールが 1 本無料でソフトドリンクは飲み放題である。夫婦 2 人で缶ビールを 2 本もらう。流れから私が 2 本を飲むことになる。いやその流れにしたのは私かもしれない。

ラウンジは混んでいて、さまざまな人たちが出発前の時間を過ごしている。ビールで乾杯しているおばさん 3 人グループを横目に見ながら、私たちも乾杯である。

フライトは 10:30 なので、まだ 1 時間半もある。会社では就業開始のあわただしい時間であるが、このようなところでビールを飲んでいる贅沢はたまらない。申し訳ないと心の中で手を合わせるが、実際の手はビールを持っている。

あのおばさんたちはどこの国へ行くのだろうか、あのビジネスマンは、あの金髪の外国人は、などと考えながら出発前の緊張感を楽しむ。

VISA カードのラウンジも隣にあり、時間もあるのでこちらにも入ることにする。事前情報ではビールの無料提供がなくなった旨を聞いていたが、なんとビールが無料サービスされている。それも生ビールである。このビールの無料サービスは無くなったのではないかと受付のお嬢さんに聞いたら、そんなことはないという返答である。

こちらのラウンジの方が先ほどに比べてはるかにすいている。私と同じ情報でアルコール好きは VISA のラウンジを敬遠する人が多いのかもしれない。表に出てみると隣のラウンジは AMEX の他に JCB や楽天など多くの種類のカードが利用できると看板にある。そうか、最近は新手のカードが世の中にたくさん出回ったせいかもしれない。やはり猫もしゃくしもである。

■感激の機内エンターテインメントの進化

フライトはドイツの有名なルフトハンザ航空である。今回の便は ANA とのコードシェア便（共同運航便）でもあるので日本人向けサービスも充実している。食事は日本人シェフが監修したとかで機内食としては十分な味である。

設備はとても充実して機内エンターテインメントが凄い。座ると目の前に液晶画面が各席に装備されているが、この液晶画面一つで何でもできる。CA（乗務員）を呼ぶとか手元照明を点けることに始まり、ビデオ、音楽、ニュース、フライト情報、ゲームなどである。

まず言語を選び、各プログラムを選ぶのである。選べる映画の本数も多く、全体では数百本になる。私は早速、好きな 007 映画の日本語吹き替え版を楽しむことにする。

かつては機内の映画は 1 フライト 2 本程度が上映され、ビデオテープで上映されるので乗客全員が同じものを同じ時刻に同じシーンを見るのが当たり前であった。つまり全員が同じ映画館にいるのである。ところが、見る映画の選択肢が広がっただけではなく、オンデマンドで上映されるので、各自がどのタイミングで見始めても必ず映画の始まりから見るができる。自分の都合で中断する場合もその中断したところから続きが見られる。

専門的なことになるが、機内にサーバ（配信コンピュータ）を置いて、そこに各座席からアクセスすることで実現しているのであろう。機内のサーバと一言で片づけるが、機内の温度、気圧、振動などその動作環境も並大抵でない。そしてそれを制御するソフトウェアもしっかりである。

私が勤めている会社でもこの飛行機機内設備を担当している事業部があるが、技術者の苦勞が目に見え、ただ技術者にとっては、こんなサービスを実現したい、こうありたいという具体的な目標が見えて、お客様の喜ぶ顔がわかるので難題に挑戦する気がわいてくるのであろう。

技術者とはそういうものである。いや技術者だけではないかもしれない。

「働く」とは周りの人を楽にする「はたらく（傍楽）」という意味があると会社の上司が言っていたことを思い出す。

ともかく本当に便利になったとつくづく感心する。

感心するのは映画だけでない。フライト状況表示というプログラムであるが、今この飛行機が地球のどのあたりを飛んでいて、さらに詳細な場所も分かる。そしてその表現方法に感心させられる。

コックピットからの目線での表示やバードアイ表示もしてくれる。バードアイとはカーナビで鳥の目線のように上空から行き先を見通すことであるが、この手法にさらに工夫がしてある。

乗っている飛行機を別の飛行体から見ているのである。例えば、横斜め上空から見ながら、回りこんで後ろ上空から飛行機を客観的に見ているのである。最近の映画などではよく使われる手法であるが、フライト状況表示でそんなことをするのは時代は変わったと脱帽である。

そしてその飛行機の下や背景には飛んでいる地形が映り、都市には地名がついている。それも言語に日本語を選択しているのでカタカナで都市名が表示されている。

このフライト状況表示だけでも充分時間を潰せる。周りの乗客を見渡すとフライト状況を見ている人が以外に多い。とにかく参りましたである。

■フランクフルト経由も悪くない

乗った飛行機はルフトハンザ機でイタリア直行便ではないのでフランクフルトに到着する。

この空港はとにかく広い。駐機している飛行機はほとんどがルフトハンザ機であり、ドイツ最大の空港というのが実感できる。

さて、EU域に入ったのでここで入国審査がある。そして驚いたのは厳しいセキュリティチェックである。昨今のテロ対策のためになのか、通常の金属探知機以外に手をあげさせられてカプセルのようなゲートに入れられ、四方のカメラで何か隠し持っていないかを見ているのである。

ちょうど拳銃を突き付けられてホールドアップする姿を想像してもらおうと良い。それもシャツ一枚になって手をあげるので、隠し持つことは確かに難しい。いかにもドイツ人、何事にも徹底している。

フランクフルト経由のためアルプス越え 1 時間のフライトが楽しめる。日本を朝早く出て来たのでまだ明るく、雪をかぶったアルプスの山々を見ることができる。

右の窓にマッターホルンらしき山が見える。マッターホルンはイタリアとスイス国境にあり 4478m の山だからきっとそうである。

この山は槍の先を立てたような形をしており、日本の槍ヶ岳に似ている。いや日本の槍ヶ岳がマッターホルンに似ているのが正しい。何しろアルプスはこちらが本家で、日本アルプスというのはこちらのアルプスを真似てつけた名前であるから、〇〇銀座や、小京都などと同じである。

日本国内で普通にアルプスというと日本アルプスを指し、さらに北アルプスや南アルプスなど細分化され、あるいは甲子園球場ではアルプススタンドというように内野席と外野席の間にあるそそり立つような観客席の呼び名にも使われ、アルプスは日本に溶け込んでくる。

名前、ネーミングはとても大事である。昔、群馬県の高原キャベツで有名な嬭恋村に別荘地を開拓して南浅間高原として売り出したが、さっぱり売れなかった。そこで名前を変えて売り出したら即座に完売したという。

そう北軽井沢である。方角的には軽井沢の北に位置するが、あそこは群馬県である。

そんなことを思い出しながら、ぼんやりとマッターホルンを見ているうちにミラノに到着である。

第二章 まずはイタリア北部から

■ミラノは美人が多い

ミラノはイタリア第二の都市で、芸術やファッションで有名である。確かに道行く女性はスタイルが良いし、美人も多い。センスが良いと言ってもいいかもしれない。やはりミラノである。

このミラノのサンタ・マリア・ディレ・グラツィエ教会にはレオナルド・ダ・ヴィンチの名画「最後の晩餐」がある。入場には制限があり 15 分間で同時に 25 人しか見られない。そのために

予約制で、日本からも予約できるが日本出発前に調べたところ既に空きがなかった。直接行って空きがあれば思いだめ元で行こうとして添乗員と現地ガイドに相談したが、やめた方が良いと言われあっさりあきらめる。

日ごろはレオナルド・ダ・ヴィンチが好きで尊敬しているなどと吹聴しているが、我ながら情けない。

その代わりにスカラ座の前にあるレオナルド・ダ・ヴィンチの像を拝むことにする。

この像からアーケードがドゥオーモ前の広場まで延びている。このアーケードはアーチ型のガラス天井でできており、その規模は日本の〇〇銀座のアーケードなどとは比べ物にならない。規模だけでなく、芸術の街にふさわしく上部の壁画や歩道のタイル装飾も素晴らしい。

ドゥオーモとはイタリア語で大聖堂を指す言葉であるが、ガイドブックや地図ではドゥオーモとそのまま記載されている。イタリアのどの街にもその街を代表するドゥオーモが街の中心にあり、その前に広場がある。そしてこのミラノのドゥオーモはケタ違いに大きい。

その大きさにびっくりしつつ、スフォルツェスコ城なる城が歩いて10分くらいのところにあるので街並み探索兼ねて城見物に行く。

街には路面電車が走り、きれいな街並みをしている。若い女性のストリートミュージシャンがフルートの演奏をしており、彼女の前にはいくらかのお金が投げ込まれている。そして、この娘も美人である。

城は入口に100m以上の大きな塔があり壮大である。1466年完成とのことで、日本では織田信長の時代である。どうも日本の年表に置き換えてしまう癖がある。



芸術的なアーケード



ケタ違いのドゥオーモと広場

■ロミオとジュリエットの街

ミラノからベネチアに行く途中でベローナという都市がある。昔ここは東西南北を結ぶ要衝の地で特にアルプス越えをしてきた疲れた旅人を温かく迎えた街ということである。

そしてこの街の最大のアピールポイントはロミオとジュリエットである。観光スポットとしてジュリエットの住んでいた家、そこにはテラス窓があり、たくさんの観光客が群がっている。

その窓の前にはジュリエットの銅像があり、この銅像の胸を触ると幸せになれるという言い伝えがある。観光客みんなが胸を触るので、等身大の銅像の胸だけが光り輝いている。観察していると、その光輝く胸を中年男性は恥ずかしそうに触り、若い女性は積極的に触りまくっている。

やはり恋愛劇に心熱くするのは女性かもしれない。

しかし、これはあくまでも演劇の世界の話で、作者のシェークスピアはこの地に来ていない。モデルになったと言われる悲恋の若い男女がいて、家同士は仲が悪かったようである。

この街はロミオとジュリエットだけではなく、古い観光資産もある。中心付近には 18000 人も収容できる石造りの大きな円形闘技場もある。この闘技場は 1 世紀に建築され、今でも現役で使用されていてオペラ祭りなど開催されている。

この街は古代ローマ時代には栄えていて、街の歴史の方がはるかに古いのに後世のシェークスピアがそれに新しい価値を与えたのである。それによってこの街は観光産業で生き残ることになる。シェークスピアが作品を書いたのが 1595 年で、日本は豊臣秀吉の時代である。

■ベネチアは面白い

ベネチアと言えばゴンドラや運河であり、007 映画でもゴンドラによるアクションシーンが多く出てきて大変面白いのだが、この地に来るまでこの街の地形や成り立ちを全く知らなかった自分が恥ずかしい。ベネチアとはとんでもないところである。

このベネチアという都市は陸地から突き出た島で、島に渡る橋が 1 本かかっている。その橋は鉄道に平行して自動車道路がある。そして島は S 字の大きな運河に二分されている。

そうなった歴史的理由は現地ガイドの話では、5 世紀頃に内陸部の外敵から侵攻を防ぐため干潟に移り住んだことが始まりという。そして 9 世紀には当時の強国フランク王国の艦隊を浅瀬で座礁させて、打ち勝ったことから湿地の上に無理矢理に街を築いたということである。

城塞都市国家であるが城塞は海であり、首都を島のほぼ中央のリアルトに置いた。リアルトは今では S 字の運河の真ん中にある橋の名前になっている。

この島の広さは 5.17km² ということで、正方形だとして一辺が 2km くらいである。島内には 150 以上の運河があり、運河によって 177 の小さな島々に分かれている。そしてそれら運河には 400 の橋がかかっているという。運河というよりも小さな水路である。

さらに興味深いのはこの島の中は自動車、オートバイ、自転車が走ってはいけない。歩きのみが交通手段なのである。いや正確には、運河を行きかう船も交通手段である。

私のようなウォーキング大好きなアルチュウ（歩き中毒）にとっては感激的な街である。しかしほとんどは石畳のために足には負担がかかる。このことはイタリアの全ての観光地や都市について共通である。

島の入口の駐車場でバスを降り、船でサンマルコ広場付近の船着き場に到着する。磯の香りが漂い、カモメが飛び交っている。

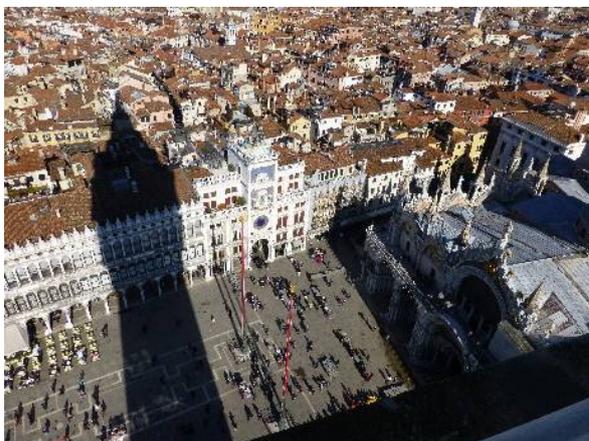
有名なサンマルコ寺院に入り、その前のサンマルコ広場でみんな記念撮影である、これらの景観のすばらしさは言うに及ばない。

そしてその隣にある鐘楼に上る。本日は晴れていてきれいに島全体を見ることができる。現地ガイドの話ではこんな天気の良い日はないそうで、あなた方は特別幸運であるという。人間はこの「あなたは特別」という文言に弱いものである。これは商売の極意かもしれない。

遠くにアルプス、青い海に囲まれた島の様子、運河の街並みが鮮明に見える。絶景である。

対岸の小さな島にサミットが開催された教会がある。サン・ジョルジョ・マッジョーレ島である。世界の要人を警護するのに海で囲まれて警備しやすいという理由らしいが、この島の景色や歴史は世界にアピールするにはもってこいである。

イタリア帰りの友人、知人、親戚も皆がイタリアは良いよ、特にベネチアが良いと話してくれる。だから妻もいつかはイタリアに行きたいと言っていたのである。



鐘楼から見降ろすサンマルコ広場と寺院



サン・ジョルジョ・マッジョーレ島

サンマルコ広場から島の真ん中にかかるリアルト橋を目指して歩き始める。途中でコープがあり、ここで買い物をする。私たち夫婦は土産物を買うのに街中のスーパーマーケットを利用することが多い。値段が安いのはもちろんであるが、その街の生活を少し体験できるからである。

コープを出てリアルト橋を目指す、どこを歩いているか分からなくなる。標識がところどころにあり、リアルトはこちらなどと矢印が書いてある。橋を渡り、路地を歩き、右や左へと30分くらい奮闘するが、先ほど通った道にまた出てしまう。地図はもっているが自分たちが今いる場所がわからない。

昔聞いた話で、海外旅行で道が分からなくなり、現地の人をつかまえて行きたい場所を地図上で指さすが言葉の壁もあり思うように伝わらない。そうしたら現地の人は何やら困った顔をしたが、ついて来いということになり、しばらく一緒に歩いてくれた。そしてある地点になったら地図をさして、今ここにいると指さした。その時はじめて自分が地図の外にいたことが分かったという話である。

今、どこにいるか分からないというのは最も困る。それは場所だけではなく、例えば受験でも希望する学校のレベルと受験生のレベルが分からなければ受験対策もできようがない。

さて、今は地図の中にいるのは確かであるが、街は迷路のようである。大迷路ゲームを楽しむ気持ちに切り替えると気が楽になり、少し見かけた通りに出る。なんと出発地点のサンマルコ広場に戻ってきたのである。

もう大丈夫である。今いる場所が地図で確認できたからである。

今度は地図を見ながら歩き始め、ようやくリアルト橋にたどり着く。そして島内唯一の公共交通機関である船で先ほどのサンマルコ広場に戻り、島内ウォーキングを終える。

旅は体験であり、ベネチアはとても面白い。

ベネチアには世界中の国から観光客が押し寄せている。帰りの船で海をみていたら、いろいろな国の国民性を表したジョークを思い出す。

確か、豪華客船が沈没しかかっている、救命ボートが不足しているので各国の男性客に海に飛び込んで欲しいと説得する場面だったと思う。こういえば各国の男性客は海に飛び込むというセリフは国民性をよくとらえている。

アメリカ人には「今、飛び込めばヒーローになれますよ」。

イタリア人には「海で美女が泳いでいますよ」。

ロシア人には「海にウォッカのビンが流れていますよ」。

イギリス人には「紳士は、こういう時に海に飛び込むものです」。

ドイツ人には「規則ですので飛び込んでください」。

フランス人には「決して海には飛び込まないでください」。

日本人には「みなさんはもう飛び込みましたよ」。

ついでに北朝鮮人には「今が亡命のチャンスですよ」。

さらに大阪人には「阪神タイガーズが優勝しましたよ」だそうで、この2つはおまけ。

■添乗員カミングアウト

今回の旅は添乗員帯同で、本当に楽でありがたい。至れり尽くせりとはこのようなことであると実感する。30代の女性添乗員であるが、とても気配り抜群、そして献身的である。翌日の予定、気温・天気、注意事項などを記した手書きのプリントを毎日配り、時には手作りの街の地図や空港で手に入れたパンフレットだったりもする。丁寧な受け答え、そして勉強もしている。

ツアー客36人の顔と名前を、彼女は最初の観光地ミラノでほとんど覚えてしまう。各集合地点で彼女は点呼を取らずにお客を目で追って、誰が来ていないかを把握する。

ベネチアからフィレンツェまで260kmのバス移動である。添乗員の彼女がいろいろイタリアの説明をしていたが、途中から彼女の身の上話に変わってくる。

話を総合すると、彼女は学校卒業後に保育士の職に4年ついて、イタリアという国と添乗員という職業にあこがれ転職した。しかし最初は安い給料で食べていくのも大変だったという。1日8000円の国内ツアーが1か月に10件ほどしかなく、月の手取りは8万円である。添乗員というのは旅行会社の社員ではなく、添乗ごとの契約で一回いくらのお金をもらうのであろう。

儉約のため食費の削減を行い痩せて親にまで心配させたことを後悔し、国内ツアーの食べ放題などをうまく使って飢えをしのぎ、ツアー客やドライバーにまで野菜をもらうなど苦労話を淡々と正直に話しはじめる。この話の中に彼女の夢と強い意志と人柄が見えてくる。

そんな彼女の転機になったのはトルコ周遊27日間の旅の添乗だったという。27日間となると添乗を希望する添乗員もなく、現地ガイドもドライバーもしかりである。したがって現地ガイドは最も評判の悪い中年おばさん、ドライバーは新人である。添乗員の彼女はお金に困っているのだからこれに行けば報酬アップをちらつかせられて同僚が止めるのを振り切って承諾したそうである。

そうしたら案の定で、お客から現地ガイドの対する苦情、お客同士のケンカ、新人ドライバーからの愚痴である。彼女いわく、27日間という期間は旅行ではなく生活である。様々な人間模様の中でいろいろな不満は彼女に集中するのである。泣きだそうと逃げ出そうと思ってもそれは許されず、苦情と愚痴を聞きながら、ガイドをおだて、お客の仲裁をしたという。

しかしながら最悪の状況から徐々に変化がでてくるのである。長距離のバス移動なのでトイレ休憩のために停車するが、その時に体操をするお客が一人いて、一風変わった体操を毎回降りるたびにしている。

その体操に添乗員の彼女も参加しはじめ、徐々に参加者が増えるようになり、その人の名前からその体操を田中さん体操と呼ぶようになる。その田中さん体操がきっかけでバスの中の雰囲気も徐々に良くなり、団結も深まってきたとのことである。

でも、その裏には彼女の苦勞がたくさんあったのだろう。

そして最後には彼女の誕生日に皆からプレゼントをもらったという、そのプレゼントもみんなでお金を集めたらしいということで、田中さん体操の田中さんからは花をもらったという。そしてそれ以来、彼女は泣かなくなったという告白である。

彼女の素直で、面白い告白にバスの中は良い雰囲気になったような気がする。体操しなくても経験に裏付けられた言葉で雰囲気を変えられることを学んだようである。人生はあきらめてはいけない夢と強い意志があれば花開くのである。

今では添乗員歴は9年ということで、33歳独身の花の添乗員、ようやく貯金もできるようになったということである。

別の日に個人的に聞いた話では、今までイタリア添乗は30回である。

添乗員として行った海外の観光地で一番良かった場所を聞くと南米のマチュピチュとのことである。

彼女の仕事ぶりには頭が下がるが、どのくらいのペースで海外添乗しているのかを聞くと月に2.5回くらい、海外専門で添乗しているそうである。気配りと時差ボケ対応など、精神面と体力面で大変な仕事をそんなペースでやっているのか、好きでない続かない。

■レオナルドの故郷フィレンツェはサッカーで盛り上がる

私の尊敬するレオナルド・ダ・ヴィンチは1452年フィレンツェが支配するヴィンチというところで生まれた。その頃フィレンツェはメディチ家が治めており、このメディチ家を中心とした観光名所がこのフィレンツェ市街地の小さなエリアに凝縮している。

この街にもドゥオーモがあり、そしてその大きさは圧巻である。その隣に広場、鐘楼、洗礼堂がある。この3点セットの組み合わせはイタリアの都市に多くみられる。

サンタ・クロチェ教会の前に広場があり、その広場の話が面白い。

その広場の中央に当初はダンテの像があったが洪水により損傷したので修復のために広場から移設した。サッカーができる平坦で四角い広場なのでその期間にサッカー大会を始めたという。

サッカーと言ってもサッカーとラグビーを合わせたようなもので手も足も使える。各チームは

ゴールキーパー4人、プレーヤー全部で27人である。サッカーというよりボールを使ったプロレスのようになるらしい。

このゲームは街を4地区に分けて対抗戦で年一回のお祭りにしたそうである。地区の対抗戦とすると人は大いに盛り上がるものである。

そして像の修復を終え、像を戻すとサッカーができなくなるので、サッカーを選ぶか像を選ぶかを住民の意見を聞く投票を行った結果、住民はサッカーを選択したのである。そのため、今では像は広場の隅、教会のすぐ横に設置されている。

住民は祭りを選んだのである。この祭りが今では伝統行事として観光資源にもなっているから面白い。古今東西、どこでも祭りは住民のためのものであり、住民の普段の生活では叶わない特別な何かを得るために行うものである。

祭りは「ハレとケ」のハレである。ハレがあるから日常のケがこなせるのである。

この話を聞いて博多山笠を思い出した。博多山笠も町内対抗の競争である。そして博多っ子は熱い。私たち夫婦も地元の友人Tさん夫妻に連れて行ってもらい感激をしたことを思い出した。地元住民の熱い気持ちが入った祭りが、観光客を呼ぶのである。

観光客を呼ぶために祭りをを行うというのを昨今見かけるが、それはあまり成功しない。

■ピサの斜塔は「くの字」

斜塔で有名なピサに行く。イタリアと言えばピサの斜塔であると私は思っている。それほどこの建築物が異様で珍しいのである。

この塔は1173年に建築着手され、最初3層位まで作った時に地盤沈下により傾き工事を中断した。大理石できていて窓もない塔なのでとても重く地盤の軟弱さが災いしたようだ。日本では鎌倉幕府成立前で平清盛の時代である。

そして当初は建設を諦めたが、約100年後そしてさらに約100年後にも傾きを是正するように上部が造られた。そのため一直線ではなく「くの字」になっていて、そして最上階の展望部分は垂直になっている。最上階はすぐわかるが「くの字」の角度は微妙でそのエピソードを聞かなかつたら分からない。

私が興味を持ったのは何故工事を再開したのかである。タイムマシンに乗って当時の人に聞いてみたい。

普通ならば取り壊して再度建築するところだが、そうしなかった。常識の打破、逆転の発想、諦めてはいけない、今あるものを有効利用する、というところだろうか。

スクラップ&ビルドはよく聞く言葉である。古いものを壊して新しくすることであるが、これが全てでないことを教えてくれる例である。この塔は傾いていなければ、こんな有名にならなかつたに違いない。瓢箪から駒だが、傾いていることが後世にこんな注目されることを工事再開した人はそれを狙っていたのだろうか。それを聞いてみたいのである。

東京オリンピック・パラリンピック2020のために国立競技場を壊して、新たに建築することになった。建築費用の膨張でデザイン変更をしているが、何故、昔のものをうまく使用するということを考えないのか。たかが50年前の建築物なのだから充分に使用できるはずである。既に壊してしまったので手遅れであるが、非常にもったいない。莫大な税金を投入するが、もう少し歴史

に学ぶべきかもしれない。

また、最近テレビ番組で家のリフォームを扱ったものがある。視聴者の家を建築家が匠の技を使ってリフォームするのだが、それを見ながら何故このような古い家を壊して建て替えずにリフォームをするのかとテレビの前で文句を言うことがしばしばある。そんな短絡的な考えは早計であろうとピサの斜塔が教えてくれたような気がする。

スクラップ&ビルドは昨今では建築だけではなく、組織や人間関係にも使用される。いずれにしてもその評価は後世がするのである。

斜塔だけ注目されるが、隣接する 3 点セットのドゥオーモも洗礼堂もとても立派である。ドゥオーモは斜塔より 100 年程古い、そしてドゥオーモも少し傾いていることを現地に行って初めて知る。



ドゥオーモと斜塔、そして傾斜



傾斜を支える写真

ここでは外国人も日本人も誰もが写真を撮る時にお決まりのポーズをする。塔が倒れるのを支えるようなポーズである。私たちが同様なポーズで写真を撮ってもらう。いたるところでこの撮影風景である。みんな子供になったようで何やらとても愉快である。

第三章 ローマそしてイタリア南部

■バス移動で思うこと

イタリア国内はドライバー付きの貸し切りバスで移動する。ドライブインに立ち寄るとチーズやチョコレートの試食やワインの試飲がある。大抵は 10% 引のチケットを入口でもらい、日本人か日本語のうまいイタリア人が対応してくれる。元々の値段はいくらなのか分からないが、このような店がツアーに組み入れられている。イタリアは公共トイレもないし、日本人が安心して買える物ができる店も少ないので好都合かもしれない。

しかしながら、乗客はトイレを利用するがあまりお金を使わないように見える。私も試食・試飲はたくさんするが滅多にお金を使わない。何故かそこであまり買いたいと思わない。

店のスタッフはいつものようにお客を招き入れ、そして同じセリフを言う。それが見えてしまっており、だからこの品物の原価いったいいくらなのかと素朴に考えてしまう。私にコンサルタントをやらせてもらえればとつい思ってしまう。

この商売はどうかと店の日本人スタッフに聞いてみると予想外の言葉が返ってきた。「昼休みが3時間もあって快適さ」である。この店は大丈夫かと思う反面、私は経営戦略を考えるとかで人生を楽しむことを忘れてしまったようである。

ローマの街に入ると路上駐車が非常に多いことに気がつく。パーキングは全く見かけない。車は車道というより車道と歩道の間に乗上げて駐車していて二重駐車も多い。多くの車はへこんだりこすったり、雨ざらしで汚い。

ミラノから南下するにつれてそれが顕著に見えてくる。家にも街にも駐車場がなく好き勝手に車を停める。自分の駐車スペースは決まっていけないのである。現地ガイドからはそんな駐車事情を聞いていたが、ローマに入ってそれを強く感じる。

駐車のためには小さい車が有利で、2人乗りのトヨタIQも見かける。トヨタが何故あんな車を開発したかが今わかった。バイク2台分の駐車スペースに車が止められるのはメリットである。

街はあまりきれいではない。ゴミが散見され、特に落書きが多い。これがローマである。

■ローマは観光客であふれている

ローマ観光に繰り出す。ローマ市内にある小さな都市国家のバチカン市国に入国する。入国といってもパスポートや審査が必要なのではなく、ここからバチカンですよという境があるだけである。

バチカン市国のメインはサンピエトロ寺院である。この内部に入るには長蛇の列である。ただ今は2月でシーズンオフなので、少ないということであるが、ピークにはどうなるかと思うとぞっとする。寺院は壮大で素晴らしい。さすがにキリスト教カトリックの総本山である。

有名なスペイン広場、トレビの泉、真実の口などをまわる。それは映画「ローマの休日」で元々の観光地をさらに名所にしたのである。そしてどこも観光客であふれている。

映画のストーリーは、ヨーロッパの歴史と伝統を持つ某国の王女（オードリー・ヘップバーン）がローマで自由のない生活への不満がたまり、密かに宿泊先を抜けだし、ベンチでうとうとしていると通りかかったアメリカ人新聞記者（グレゴリー・ペック）に介抱される。彼女の素性に気づいた新聞記者は、王女の秘密のローマ体験という大スクープをモノにしようと王女を連れ歩くことに成功する。王女はまず美容院で髪の毛を短くし、スペイン広場でジェラートを食べる。そして真実の口を訪れ、徐々にアンと新聞記者が近づいていくというものである。

残念ながらトレビの泉近くにある映画で髪を切った美容院は、今ではカバン屋になっている。そんなことはおかまいなしに店の前で写真を撮る。

そしてジェラートをトレビの泉で食べる。映画ではスペイン広場でジェラートを食べるが、みんながスペイン広場で食べるので、あまりに汚れて今ではそこでジェラートを食べるのが禁止さ

れている。

ちなみにこのジェラートは旅行社からのプレゼントで全員に振る舞われたが、みんなからは格安パック旅行の割には頑張るねと感心しきりである。

ともかく 1953 年公開のこの映画の効果はすごい。ロミオとジュリエットでベローナが有名になったのと同じで、もともと街の歴史が古く観光資産もあるが、後世の脚本家が更に新しい価値を与えたのである。そうやって街は厚みを増していくのだろう。

■すご過ぎるローマの歴史

歴史地区、コロッセオを訪れる。40000 人収容の競技場である。ローマ時代には上にテントが張られドームになるので全天候型である。そして地下には動物や闘士を収容する施設があるという。高さ 57m、楕円形で周囲 527mなんとすごいことだろうか。残念ながら後世の建築資材にするために大理石など取られて原形をとどめていない。こんなにすごいものを紀元 1 世紀に作ったのである。日本は弥生時代である。

隣には凱旋門がある。高さ 21m、こちらも古いが原形をとどめており綺麗である。凱旋門と言えばパリであるがローマの方がはるかに古い。パリの凱旋門はナポレオンが造ったもので 1836 年完成、ただし高さは 50m もある。



コロッセオ



凱旋門

ローマの歴史は古代ローマ、そしてローマ帝国に大きく分けられ。都市国家ローマができたのは紀元前 753 年、紀元前 509 年には王政から共和制に移行している。古代ローマの大部分は共和制都市国家である。

有名なシーザーが登場するのが紀元前 1 世紀である。シーザーが暗殺され紀元前 27 年にオクタビアヌスが帝政をはじめ、ここからローマ帝国になる。

この時代に現代社会の様々な基礎ができる。例えば太陽暦であるユリウス暦を採用し 1 年 365 日で 4 年に一度閏年が入る。そして 7 月は July、8 月は August に呼び名が変更されている。そう、シーザーとオクタビアヌスの名前が入れている。シーザーはジュリアス・シーザーまたはユリウス・カエサルと言語により表記が変わる。本来 8 月はタコの足の本数でオクトパスのオクトのはずであるが、7 月 8 月が割り込んだので 10 月に移動させられている。

紀元後 395 年にローマ帝国は西ローマ帝国と東ローマ帝国に分裂する。西ローマ帝国は紀元後 476 年に滅亡、東ローマ帝国は 1453 年に滅亡するがビザンチウム帝国と呼ばれて首都は現在のト

ルコのイスタンブールだ。

古代ローマは全て紀元前である。紀元前は BC と記すが Before Christ の略である。まさしくキリストの前なのである。西洋文明は簡単に言うとキリスト教文明とも言える。現代の欧米はキリスト教がベースで、西洋文明はキリスト教無しでは語れない。キリスト教徒がほとんどいない日本でも教会結婚式やクリスマスやハロウィンなどイベントだけでも数知れない。古代ローマはキリスト以前だから興味深い。

ローマ帝国は当初キリスト教を弾圧していたが途中からキリスト教を国教にする。7 世紀にイスラム教が起り、対イスラムのため十字軍を 11 世紀～13 世紀に派遣する。14 世紀～16 世紀には芸術面で人間性復活を目指しギリシャ・ローマに戻るといふ復興運動（ルネサンス）が起こる。どれを見てもキリスト教が軸になっている。

現在の形のイタリアに統一されるのは 1861 年、その後は第一次、第二次大戦を経て EU へ加盟する。不思議なもので EU はかつてのローマの支配地域に似ているような気がする。

キリスト以前とキリスト文明の全てが凝縮され、何層にも重なる歴史を作り上げてきたのがイタリア、そしてその中心ローマである。

ローマ観光は見るものが歴史のどこに位置するかを考えると非常に面白いことに気が付く。

■ナポリは大阪か

ナポリはイタリア南部の港街でとても明るい。明るいのは気候だけでなく人々も明るい。

ナポリ人はイタリアの中でも独特な気質らしい。好き勝手な振る舞い、絶対に謝らない、車の運転が荒っぽい、ナポリ出身というイタリアでも顔をしかめられるというのが現地ガイドの話である。日本でも同じようなところがある。そう大阪、それもミナミである。

スパッカナポリと呼ばれる最もナポリらしい下町を歩く。古い街で決してきれいでない、いや落書きが多く、汚い。ローマもそうであったが駐車マナーの悪さや落書きが北イタリアに比べるとひどくなる。

ストリートミュージシャンをちらほら見る、ギターの弾き語り、アコーディオンの弾き語り、ミラノや他の都市でもたくさん見かけたが、ここナポリのミュージシャンは何かが違うのである。そう洗練されていない。だからナポリなのか。

ここで酒を買う。レモンチェッロというレモン味のする度数約 30%のリキュールである。

試飲をしたら結構いけるので、土産に数本購入する。娘夫婦は酒好きでよく飲み、息子はこのような甘口リキュールが大好きである。おっと自分の分を忘れるところである。

海外のワインやウイスキーは日本でもほとんど手に入るの、私はなるべく日本では手に入らない現地の酒を買うことにしている。トルコではラク、ギリシャならメタクサである。

トルコ土産にラクを友人にあげたら、挑戦的な味だと褒められた？ことがあるが、初めて飲んだ時の衝撃的な印象はクレゾール消毒液のようである。

でもレモンチェッロは飲みやすい酒で、味もうまい。冷やして飲む食後酒である。

■奇跡のタイムカプセル

ポンペイは奇跡のタイムカプセルである。紀元後 79 年 8 月 24 日午後 1 時頃にボスビオ火山が噴火して街を飲み込んだ。火砕流の速度は時速 100km ということで逃げる暇もなかったらしい。3 日間にわたり火山灰が降り続け、街全体に 8m も積もったために、忘れ去られた街になった。

突然灰に埋もれ、19 世紀に発掘されるまで街丸ごとタイムカプセルに入っていたのと同じである。1900 年前のものがそのまま残ることはない、人間の営みによって街は進化するからである。

当時の人口は約 15000 人、城壁の周囲は 3k m、正方形とすると一辺 750m 程度である。

地元ガイドの言葉は「遺跡は想像力を働かせて見ろ」である。

噴火の時は夏の昼過ぎ、暑いので昼寝をする時であろう。人々は休もうとしている最中に、大きな地震と大きな音がして、飛び起きて外へ出た。そこへ火砕流や降灰に会い、空は真っ黒になり、街の外へ逃げることは無理と考え、大きな建物の中に逃げ込んだに違いない。

まずは、街の真ん中にある行政府、神殿、広場、高級住居を見て回る。

そしてテルマエ、日本語でいうと公衆浴場、銭湯がある。映画「テルマエロマエ」でローマの風呂文化が紹介されたが、ローマの風呂文化はここポンペイが元祖であるという。自称温泉つうの私にとって、これを見るためにポンペイに来たと言っても過言ではない。

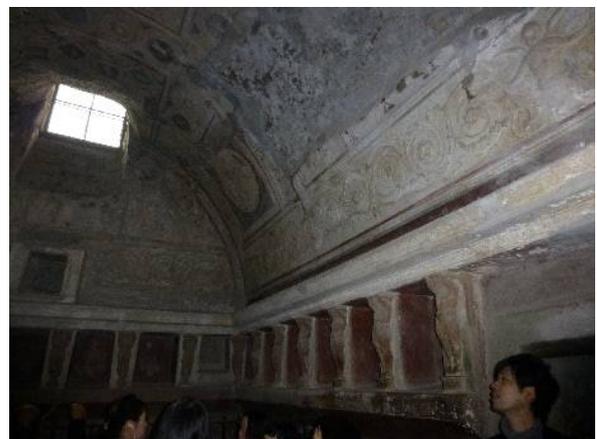
公衆浴場はポンペイ内に複数箇所あり、今回見学する浴場は小さい方というが立派なものである。建物は男女別で、それぞれいくつかの部屋に分かれており大理石の大きな浴槽の部屋、サウナ室、休憩所もある。浴槽は 3m×10m、サウナは 10m×20m 程度の大理石張りである。この時代にこの設備は信じられない、よくぞ残っていてくれた。まさしく奇跡である。

ポンペイ全盛期は日本では弥生時代である。佐賀県の吉野ヶ里遺跡が弥生時代なので集落はあったが風呂はない。ずっと時代が過ぎて蒸気風呂が平安時代にはじまる。そのようなことが枕草子に書かれているらしい。そして浴槽でお湯に浸かるのは江戸時代からである。

街は車道と歩道がきっちり分かれており、車道の両脇に歩道がある構造で歩道の方が 10cm くらい高くなっている。車道は馬車が通るので、フンで汚くなるから水を流していたらしい。現代の都市機能がほぼそろっていることに驚きである。



ポンペイの街並み 車道と歩道



サウナ室

パン屋、居酒屋、水汲み場、宅配便屋、墓などが当時のままに残っている。パン屋にはパン焼きの窯が、居酒屋にはワインの壺を入れる丸くり貫かれたカウンターが、宅配便屋は絵文字表札が、そして墓には大理石に掘られた文字も残っている、ローマ字である。

人々の死骸も多数出土している。いや正確には死骸ではない。人間を飲み込んだ火山灰が固まった後に肉体が腐食したために火山灰の中が空洞になる。そこへ石膏を流し込み火山灰を取り除くことで再現したものである。

よく見るとみな鼻がとても高い。やはりローマ人は「平たい顔族」ではないのである。

■人間ウォッチング

いったいどんな人たちがこの旅行に参加しているのだろう。2月頃の海外旅行は昔なら定年退職した熟年夫婦が多く、近年は学生の卒業旅行が多くなってきている。今回のこの格安パックツアーは少し違う。急に値段が下がって出発日が増えているのが影響している。

参加36人の内訳は1人で参加は5人、学生の卒業旅行も5人で男3人組と女2人組である。そして今回特に目に付いたのは親子である。

親子は母娘が4組、そして母息子が1組である。子供は全員大学4年生で卒業旅行を母親とするのである。きっと父親は邪魔者扱いされながら会社で働いているのだ。

そして残りは熟年カップルが8組である。

まず、一番目立ったのは1人参加のおネエである。最初に見たときには男女の区別がつかなかったが、トイレでは男のトイレに入ってきたのでとりあえず男である。でも、化粧もしてピアスもして、髪も染めていて後ろで束ねて上にあげている。やせ形のどこにでも居そうな女性に見える。彼女いや彼はノリがよく、何も臆せず人に話かける。ただ者ではない。年齢は不明であるが多分50歳代であろう。

次は、やはり1人参加のおばさんで、私が驚いたのは彼女の英語力である。英語が堪能なのであるが、とてもそんな風には見えない。どう見ても単なる太った田舎のおばさんなのであるが、この格安パック旅行を見つけて来られるだけの旅行好きであろう。人は見かけによらないのである。

やはり1人参加の面々は面白そうな人が多い、電気メーカを定年退職した昔バリバリの元営業マンや、スーツケースを持たないバックパッカーのおばさんもいる。

そして、どうしても気になるのが母息子で来ている親子である。母息子の組み合わせはどうも考えにくい。大学4年生の男が母親と一緒にイタリア旅行に行くか？である。

本人たちに聞くと、過去にも母親が何回か誘ってようやく卒業旅行なので同行してくれたとの話である。当然、費用は母親持ちであろう。

同年代の卒業旅行の男3人組に母親との旅行はどうかと訊ねたところ、地獄だとか、3日間が限界だとかの返事が返ってきた。地獄とはひどいが、心情は察しうる。

それを考えるとこの母息子の息子は聖人に見えてくる。そんな目で見ると最初はマザコンかと思っていたが、結構しっかりしているように見えてくるから不思議である。

母娘の親子組はいたってよくあるパターンであるが、この時期に多いのは娘が大学4年生だからであろう。喧嘩しながらも和気あいあいと旅行を楽しんでいる。会話の量は熟年カップルよりもはるかに多い。

やはり会話が最も少ないのは熟年カップルである。話し疲れているのか、話すことがないのか沈黙が多い。人のことは言えないが、はるばるイタリアまで来たのであるから、にわかイタリア人を目指すのもよからうと思う。話好きなイタリア人の暮らす国に来たらその地に溶け込むことを試みることもお勧めである。

そういえば日本の古都を旅して神社仏閣を回っている欧米人は日本人よりも日本を勉強してワビサビも理解して、物静かというイメージがある。そしてイタリア人も日本の古都にきたらそんな風になるような気がする。

ちなみに最も会話の多いのは大学生仲間の卒業旅行で、それも女2人組である。

■食事は炭水化物のオンパレード

全食事付がこのパッケージ旅行の売りである。飛行機の機内食、朝食はホテルのバイキングである。そしてレストランで昼食、夕食で10回が提供される。

朝食バイキングは日本のように食材が豊富ではない。野菜はほとんどなく、ハム、ソーセージ、チーズ、卵などにパンである。

レストランの食事は3コースと呼ばれる形態で、前菜、メイン、デザートで3皿で出てくるからこう呼ばれるらしい。団体の日本人客が利用するレストランは各都市で同じところが多く、時々一緒になる他の旅行会社のパッケージツアーの食事もほぼ同じ内容である。その量や味付けは日本人向けに多少はアレンジしているかもしれない。

前菜はパスタやドリアが多く、野菜はあまり出てこない。メインは肉や魚が多いがピザが出てきたこともある。ローマの昼食で1人1枚の大きな焼きたてピザが出てきて、年配女性は食べきれない人も多かったのを思い出す。そしてデザートはアイスクリームや果物、ジェラートなどである。ジェラートとはイタリア語で凍ったという意味で氷菓のことで、大変美味しい。

しかし、主食はあくまでもパンなので、3皿の他に必ずパンが出てくるのである。本当に炭水化物が多い。これは太るだろうと思うが、イタリア人はあまり太っていないのが不思議である。

パッケージ旅行の食事は、最初は見知らぬ人同士なので何かぎこちない。だんだん親しくなってくるにつれて食事も盛り上がってくる。8日間程度の旅行では、最初の2~3回の食事では意気投合すると、あとはお互いに席を確保するようになってくるのが良くある風景である。

この旅行のレストランで食べる最後の食事はローマでの夕食である。明日は帰途につくので各テーブルでは乾杯の声が聞こえる。私たちのテーブルもワインをフルボトルで頼んで代金を割り勘にする。ハーフボトルは10ユーロ、フルボトルは15ユーロなのでお得である。旅行の最後の頃にはそんな知恵もついてくる。

そんな時に、添乗員がみんなのテーブルのほぼ中央に来て御礼の挨拶である。そして誰からかワイン入りのグラスを渡されて乾杯の音頭をとってもらい、大いに盛り上がる。遠い異国の地での開放感と旅が終わりの達成感や寂しさなどが複雑に絡み合っている。

レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画を見ることは叶わなかったが、ここに楽しい最後の晚餐を体験することができた。

第四章 なぜ、こんなに安いのか

■イタリアは税金の国

格安パッケージツアーの格安の理由を分析したいが、その前にイタリアの税金について調べる。イタリアの経済状況は良くない。国に借金があるからで、政府債務はユーロ圏で最大の1兆9000億ユーロで、ギリシャの5倍以上ある。

ユーロ圏に残るためにあらゆる面で税金を取ろうとしている。

まず、日本でもおなじみの消費税については22%である。食料品などは軽減税率が適用されるので10%か4%である。

そして今回イタリア旅行して初めて知った税金が2つある。ひとつは通行税である。各都市に大型バスで入る場合にバス1台につき4万円くらい取られる。具体的にはベネチアで340ユーロ、フィレンツェで380ユーロ、都市によって若干金額が異なる。

1人いくらではなくバス1台で課税される。とはいうものも一人当たりが無理やり換算すれば、今回のパックスツアー参加者は36人なので、概ね1人10ユーロ=1300円程度になる。これは旅行社の負担で旅行代金に含まれている。

そして、もうひとつは宿泊税である。都市によって、そしてホテルのランクにより異なるが宿泊者1人につき1~5ユーロ程度である。今回はホテルに6泊し合計で19ユーロである。これは個人個人がフロントで清算すると大変なので添乗員がまとめて払って後から請求された。

イタリア30回の添乗員の話では税金は年々上がっているとのことである。

それにしても日本の債務はイタリアの5倍もあるが日本は大丈夫だろうか、真剣に心配してしまう。おっと、この問題について書くときりがないので、ここまでにしておこう。

■こんな安くて大丈夫か？

とにかく99800円は安い。添乗員付き全食事付き、ついでにトレビの泉のジェラートまでサービスしている。阪急交通社はやっていけるのか、添乗員も真顔で心配していた。

この問題は私も興味津々である。その正体を知りたくてこれから検証してみる。旅行記としては全く新しい試みであるが、何しろ旅のチカラ研究所である。

尚、旅行社への払い込み以外にオプションツアーでピサ、ナポリ、ポンペイを回っており、これは99800円には入れない。

最初に大前提としてこのようなパッケージツアーは絶対に赤字では企画されないと私は思っている。それに沿って考えると費用に最も影響するのが飛行機代であるが、これは価格があってないものである。理由は飛行機を空席で飛ばしても意味がないので時期や市場状況により大幅な価格ダウンを航空会社がしてくる。その反面で繁忙期には高額に跳ね上がる。したがって飛行機代は最後に考えることにする。以下、1人当たりの費用で推定する。

まず旅行会社の取り分であるが、インターネット販売で諸経費も少ないので利益含めて15%として15000円(①)とする。36人で54万円、最低でもこのくらいの限界利益がないと社内で企画が通らない。

各都市へ通行税が5都市で1人あたり50ユーロ=6500円(②)である。

添乗員への支払いは、添乗員のカミングアウトでようやく貯金ができるようになってきたとあるので、年収を推定し400万円とし、月に2.5回くらい搭乗しているとのことなので年間30回で1回あたり13万円になる。36人で割り1人3700円(③)になる。多分40人で企画していると思うが定員いっぱいにならないリスクを考えると実際に参加した36人で考える。

バスと運転手込みの貸し切り費用は、日本では1日あたりバス1台と運転手で10万円くらいである。ゴルフのコンペでいくつか見積もりを取ったことがある。

新卒者や公務員の給料から日本の物価とイタリアの物価をおおざっぱに比較すると日本の6割程度になる。したがってバスと運転手費用は6日間で60万円、物価換算をして36万円、1人あたり10000円(④)になる。

ホテルは星3つホテルのツイン1泊で日本では10000円くらいである。6泊で60000円であるが、ツインなので1人分30000円、イタリア物価換算して6泊で1人20000円(⑤)になる。

海外旅行はツインルームに2人宿泊を前提に費用が決まっているが、今回1人参加の1人部屋の人に追加料金を聞いたところ30000円と返事が返ってきたのでいい線かもしれない。

食事はレストランで10回提供されたが、イタリア物価換算して1食500円くらいであろう。その根拠は、食事と同時に飲み物の注文を受けているが、ビールは900円、コーラや水でも400~500円もしている。これでレストランは儲けている。しかも同じメニューを同時に大量に作り、早くから予約もされているので仕入れも安い。従って10食で5000円(⑥)になる。

現地ガイドの費用は、現地ガイド帯同時間は全行程で12時間くらいであり1時間3000円として36000円を36人で割ると1000円(⑦)でなる。

また、ホテル、食事、バス、現地ガイドなどは現地のエージェントに委託している。この手数料を委託費用の10%程度の1人5000円(⑧)と推定する。そのほかに免税店やガラス工房、皮工房などに連れていく場合はバックマージンが現地エージェントに入るはずである。今回のツアーは全てミキ・トラベルが現地で受け入れている。

これら(①~⑧)を合計すると66200円になる。99800円の残り33600円が飛行機代になる。

2月が年間で最も閑散期で海外旅行の価格が下がる時で飛行機代もこれに連動している。さらに昨今はテロでヨーロッパ便はかなり影響を受けている。2001年9月11日のニューヨークの同時多発テロ直後のニューヨーク旅行は19800円で販売されていたことを思い出すと、33600円は航空会社が大幅価格ダウンをして出してきた金額としても充分にありうると思う。

おっと、ジェラートの費用を忘れるところである。旅行会社の諸経費にしておこう。

オプションツアーで同席した他に旅行会社の利用客からも費用の情報を得たので追記しておく。7泊8日間のパッケージツアーで行程・観光地もほぼ同じである。

日本旅行の学生卒業旅行は添乗員付き、食事は6食くらい付いて150000円である。

HISは98000円だが食事は全く付いていない。

■費用の内訳（全て1人当たり費用）

費用は1人あたり約16万円強である。オプションツアーを除けば13万円台になる。やはり相当に安い。

ツアー料金（サーチャージ込）	99800円
日本国内空港施設使用料・旅客保安サービス料	2610円
各国空港の旅客サービス施設使用料と空港税等	10770円
現地オプションツアー ピサの斜塔	8000円
現地オプションツアー ナポリ&ポンペイ	17000円
イタリアのホテル宿泊税 19ユーロ	約2470円
現地での飲みもの、土産など	約15000円
国内交通費	5770円

総合計（一人当たり） 約161420円

■旅の記録

- 2月18日 10:50 成田空港出発、14:50 フランクフルト空港到着、17:00 フランクフルト空港出発、18:00 ミラノ空港到着、19:30 ホテル到着（ミラノ）
- 2月19日 8:30 ホテル出発、ミラノ市内観光（自由行動）ベローナへバス移動（170km）ベローナ市内観光、ベネチアへバス移動（123km）、19:00 ホテル着（ベネチア）
- 2月20日 8:00 ホテル出発、ベネチア市内観光、フィレンツェへバス移動（261km）19:15 ホテル到着（フィレンツェ連泊）
- 2月21日 8:00 ホテル出発、フィレンツェ市内観光、午後ピサへオプションツアー（バスで片道90分）
- 2月22日 8:00 ホテル出発、ローマへバス移動（280km）バチカン市国観光、ローマ観光、19:40 ホテル到着（ローマ連泊）
- 2月23日 7:35 ホテル出発、ポンペイとナポリのオプションツアー（バスで片道3時間）
- 2月24日 6:45 ホテル出発、9:50 ローマ空港出発
11:50 フランクフルト空港到着、13:35 フランクフルト空港出発
- 2月25日 9:05 成田空港到着

最後に、誠実で気配り抜群な添乗員が8日間をまとめてくれたプリントを付けておこう。

✿ 全食事付！イタリア8日間 ✿ · 2016年2月18日(木)～2月25日(木) ·

(株)阪急交通社 ♥ トラピュス 36名様

① 2/18(木) LUFTHANSA

✿ 8:30 成田空港集合 ✿
 ↑ 10:50 成田空港出発!!
 ↓ ~約12時間~時差-8時間~
 ↑ 14:50 フランツァ空港到着 ✿
 ✿ みは様初めての夜復合わせ ✿
 ↑ 17:00 フランツァ空港出発 ✿
 ↓ ~約1時間~アルプス山脈へ~
 ↑ 18:00 19リヤ・ミラノ空港着!!
 ホテルへ約40分~
 19:30 ホテル到着 **START!!**
 *ホリディン・ミラン・
 ハルド・グラボ★

② 2/19(金) 19:30 ホテル出発

✿ ミラノ市内へ約1時間~(送湯)
 ✿ ミラノ市内自由行動 ✿ ・スカラ座
 ・ヴァットリネ・エヌエー2世ガリア・ドウネモ
 ✿ ミラノ風リゾット・ミラノ風カッレリ
 ✿ ベローナへ約170km・約2時間~
 ✿ 世界遺産・ベローナ市内観光 ✿
 ・エリベ広場・ミニョーリア広場 ♡ ♡
 ・ジュリエットの家・アリーナ・ガラ広場
 ガイド MS マヌエラ
 ✿ ベネチアへ
 約123km・1.5時間
 19:00 ホテル *ホリディン

③ 2/20(土) 19:00 ホテル出発

✿ ベネチア本島へ約20分~
 貸し切りポートにて約20分~
 ✿ 世界遺産・ベネチア市内観光 ✿
 ・ドゥカレ宮殿・ため見橋 ♡ ハブ...
 ・サンマルコ広場・サンマルコ寺院(入場)
 ✿ ベネチアアンダラス工房見学・自由行動①
 ✿ イカスミスパゲティ・フライ~自由行動②
 オプショナル♪ゴンドラ遊覧♪~全員集合~
 貸し切りポートにて駐車場へ約20分~
 フィレンツェへ約261km・約3.5時間~
 19:15 ホテル到着
 *ハルドフロレンス2連泊★

⑧ 2/25(木)

↑ 9:05 成田空港着!!
 GOAL!! おり帰りはこい!!
 どうぞ、お気を付けて☆

⑦ 2/24(水) 6:45 ホテル

↑ 9:50 イタリア・ローマ空港出発!!
 ↓ ~約2時間~ ↑ 11:50 フランツァ空港着
 ↑ 13:35 フランツァ空港出発!!
 ↓ ~約11時間30分~時差+8時間~
 *機中泊★

⑥ 2/23(火) ✿ 終日自由行動 ✿ 又は オプショナル

♪ 異文化のローマの休日♪ 17:35 オプショナルツアー出発
 オプショナル♪ ナポリ・ポンペイ観光 (終日) 6名様
 オプショナル♪ ヴァチカン美術館半日観光♪ 10名様
 ✿ 昼食 (ご希望の方) 12:20 ホテル (ピザ料理)
 19:45 ホテル集合 ~ レストランへ最後の晚餐♪
 ✿ 夕食 (トマトスパゲティ/ピラマのソテー/4コポリン)
 ✿ 各自ホテルへ ~ 21:30頃ホテル着 ~ ★連泊★

⑤ 2/22(月) 19:00 ホテル出発 ~ ✿ 永遠の都ローマ ✿

✿ ローマへ約280km・約4時間~ ✿
 ✿ 世界遺産・ヴァチカン観光 ✿ ・サンピエトロ大聖堂
 ✿ 世界遺産・ローマ歴史地区観光 ✿
 ・トレビの泉 (コイン投げ・ジュエトプレゼント)
 ・スペイン広場・スペイン階段・コロッセオ (パスタモザイク)
 ・車窓より... ベネチア広場・真実の口・チコマモ
 ・マリア広場・大統領官邸 (190cmの衛兵)
 ✿ アペロンテ・サルティンピョカ 19:40 ホテル
 ✿ 19:47さんCiao! ★サンマルコ2連泊★

④ 2/21(日) 19:00 ホテル出発

✿ 世界遺産・フィレンツェ市内観光 ✿
 ✿ ミケランジェロ広場にてフィレンツェ市内を一望 ✿
 ・サンタ・クロチエ教会 (ガリオガリシほどか眠る)
 ・ミニョーリア広場・ヴェッキオ官殿・ダビデの像
 ・ヴェッキオ橋・幸せの11シシの像・天知園広場
 ・ドウネモ・洗礼堂・ジョットの鐘楼~自由行動
 ✿ パンネアラビアータ・4キンのグリル
 ~昼食後、夕食まで自由行動~
 オプショナル♪ピサ観光♪ (7名様)
 ✿ ピサへ1時間15分~歩き
 ♡ ピサの斜塔塔・洗礼堂
 ♡ ドウネモ~自由行動
 ✿ フィレンツェへ
 ✿ このこのパスタ
 ♡ 夜のミケランジェロ広場
 ♡ 20:00ホテル



みは様、8日間のイタリアの旅はいかがでしたでしょうか？
 世界遺産の宝庫、イタリア!!
 毎日が驚きと感動の

連続!! お天気にも恵まれました。
 みは様にとって、心に残る思い出
 なるますより願っております。様々な
 ご協力により心より感謝致します。
 この度(旅)の出会いに Grazie!!
 本当にありがとうございました!!



添乗員: 柴田美保